



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

AIの時代に「精神世界」の深さ、大切さを考へる —竹本忠雄先生をお迎へする今年の「合宿教室」—

池松伸典

近年のAI(人工知能)技術の進歩はめまぐるしいものがある。計算装置として始まったコンピュータ(電子計算機)が、これまで人が行つてゐた知的な判断をもするやうになつてくると、SF小説に描かれてゐたやうに、近い将来人類がコンピュータに使役される末恐ろしい世の中になるかもしれない。さらにその技術開発のスピードが日増しに速くなり、AIが社会に与へる影響について十分に検討する時間的余裕のないままに、便利な道具として汎用されてしまつてゐる。かうした現状を見ると人間社会の明日はどうなるのかとの危惧の念を覚えるのは私だけだらうか。

AI技術の進歩によつて、著作権法の見直しが急がれるだけでなく、フェイクニュース(虚偽報道)の横行、軍事への利用など、AIは多くの問題を孕んでゐる。人類

滅亡の危険性さへ指摘されてゐる。その詳細については詳らかにしないが、前述のやうな時代の到来を前にして、我々はいかに対処すべきなのか、失つてはならない大切なものは何なのか等々について、これまで以上に真剣に考へるべき時がきてゐるやうに思ふ。

元来コンピュータは多量の情報を処理する能力に特化した機器であり、情報量が多くなれば多くなるほどその精度は高まり、現実世界に通用するものになっていく。だが、そこから得られたものは多量の情報を合理的に処理することによつてできた仮想現実である。機器そのものには感情はない。かうした当り前なことへの意識が薄らいで、自分の要求を容易に満たしてくれる仮想現実をそのまま受け入れてゐると、複雑で微妙に変化するありのままの現実を見る力が衰

へていくのではなからうか。例へば人の情感を表現するはずの詩や短歌、俳句もいづれはAIが作り出した作品の中から選んで自分の作品としてしまふやうになり、先人たちが思ひを籠めた「言葉」を深く理解しようとすることも少なくなつていくのではないか。

かつて小林秀雄先生は本会主催の「第十九回全国学生青年合宿教室」(昭和四十九年)において、「信ずることと知ること」と題してご講演された。もう五十年近くも前のことになるが、当時学生だった我々に語られた先生のお姿が思ひ出される。お話は念力・テレパシー(超感覚的知覚)から始まり、不可思議な事実にお触れになりながら我々現代人が忘れてはならないことについて説かれた。時折この講義録を読み返すことがあるが、次第にその大事さに気づかされる。今回改めて読み直してみても、当時なかつたAIが汎用されて思想の衰弱が一層進んでゐるかに思はれる今こそ、この様なお話に耳を傾けるべきではないかと思つた。

「…僕らが生きてゆくための知恵といふものは、どれだけ進歩してゐますか。例へば論語以上の知恵が現代人にありますか。これは疑問です。僕らの行動の上における、実生活上の便利さ

は、科学が人間の精神を非常に狭い道に、抽象的な道に導いたおかげだといへるでせう。さういふことを、諸君はいつとも気をつけてゐなければいけないのです…」

活字離れや信仰心の稀薄化が言はれる現代において、我々の胸中に信じられるものがどれだけあるだらうか。便利になればなるほど安逸な方に歩を進めて、現実そのものを見なくなり、本来あるべき「広やかな心の世界」を忘れてしまひがちである。例へば「風景」を見る際にも気を鎮めてじつと見つめてゐると葉の緑の多様な美しさに気づき、鳥の声も自分に語りかけてくるかのやうに聞えてくる。現実の姿は見れば見るほど様々なことを感じさせてくれるのである。今年も九月初めに「第六十八回全国学生青年合宿教室」が東京都八王子市の大学セミナーハウスで開催される。竹本忠雄先生には「大和心のかたちと秘密—現代文明の変貌に真向かいて—」の演題で御講義をさせていただく。日常の喧噪から離れた環境で、お話を拝聴して、互ひに思ひのたけを語り合ふことで人間の精神世界の深さ、大切さに改めて気づかれることと思ふ。多くの方々のご参加をお待ちしてゐます。(若築建設(株))